The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「記憶の場」として見た二宮尊徳
Author(s)	ゼルナ, インゴ
Citation	年報人間科学. 2004, 25, p. 155-166
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7602
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「記憶の場」として見た二宮尊徳

インゴ・ゼルナ

〈要旨〉

この論文はフランスの歴史学者とアカデミー・フランセーズの会員に選べられたピーエル・ノラによって導入された「記憶の場」というコンセプトと江戸時代末期の思想家である二宮尊徳を結びつける試みをする。「記憶の場」というコンセプトは今までの歴史学が最も頼っていた資料、いわゆる第一次史料と呼ばれるテキストなどと、今まで使われなかった史料（たとえば、日記などの主観的なもの）を利用する。すなわち、ノラはポストモダンな歴史学のアプローチをとっている。記憶の概念はフランスの社会学者モリース・アルヴァックスの「共同体記憶」に基づいて、歴史学的な方法で表せない、ある歴史の事実についてのイメージである。すべての「記憶の場」には歴史学的な面と記憶的な面がある。その二つの面をはっきりさせるために、この論文は二宮尊徳を挙げている。二宮尊徳の歴史的な活動と彼の現代に残っているイメージはいかにも異なる。当時、思想家であった二宮は今、彼の幼児期の働きながら一生懸命に勉強しているイメージのままでほとんどの日本人の記憶に残っている。そのイメージの転換は明治時代の国定教科書制度が確立した時の結果である。この論文はその転換とその原因を明確にしたい。

キーワード

二宮尊徳、ピエール・ノラ、記憶の場、共同体記憶、修身教育

はじめに

今年の一一月末まで、ドイツテレビ第二放送局（ZDF）が「偉大なドイツ人」（Unsere Besten）という番組を放送していた。英国放送局（BBC）の大人気番組「偉大なイギリス人」（Great Britons）を手本とし、ドイツ――その表現は歴史的に極めて漠然であるがここでは説明を省こう――の史上最も偉大な人物を選んだ番組はイギリスと同様に人気があった。テレビの観衆と大衆紙のビルド（BILD）の読者による投票でまず大雑把に一〇〇人のランキングを作り、その後トップテンの詳細順位を投票で決めた。結局、首位は戦後の元首相のアデナウアー、第二位は宗教改革者ルター、第三位は思想家のカール・マルクスになった。この番組はドイツでかなりの反響があった。その反響の原因は、近年一般の人々の間にもかつて専門家の領域であった歴史や歴史の記憶についての関心が広がったからである。

九〇年代半ばからドイツの文化史や記憶の文化についての本が数多く出版されてきた。そのきっかけはおそらくフランスの歴史学者のピエール・ノラの著作『記憶の場』全七巻であろう。ヨーロッパの各国ではその翻訳に次いでそれぞれの国家的な記憶の場についての本が出版されたのである。京都大学の谷川稔による日本語訳もようやく去年の秋から出版されたにもかかわらず、日本の記憶の場についての本は未だ出版されないようである。「記憶の場」というコンセプトはどこまで他国に転用できるかという議論がヨーロッパでも展開されたが、それぞれの国で適合された上に、さらに大きく世間の共感を得たのはノラのコンセプトの魅力を証明している。ここで、「記憶の場」という概念や歴史的コンセプトをフランスやヨーロッパと異なる文化圏に属する日本に適応できるかについて、二宮尊徳という歴史的な人物を観察しながら考えたい。

ピエール・ノラの「記憶の場」という理論的なコンセプトが単独に発展されたのではなくて、むしろ歴史学の記憶論の――現在の歴史学の動きをみれば、重要な――一つの要素しかない。それゆえに、まずそのコンセプトの背景とその流れに少し触れてからノラのライフワークを考察していきたい。次に二宮尊徳の伝記と彼の思想を簡単に触れたい。最後は二宮尊徳を歴史的な「記憶の場」として観察しながら、特に明治末期から昭和初期にかける、彼についての記憶の変容を探っていきたい。

「記憶の場」の理論

西洋歴史学においての「記憶論」はおよそ啓蒙時代から始まったが、一九二〇年代に美術史家アビー・ワールブルグ（一八六六―一九二九）が「記憶共同体」という表現をはじめて用いた。その言葉で彼は、人間が特定の文化を問わずにイメージや身振りを利用しながら自分を不合理的な不安から守ると解釈した。この個人を巡る説より、フランスの社会学者モリース・アルヴァクス（一八七七―一

九四五）の共同体記憶論が現在の議論に大きな影響を及ぼしている。アルヴァクスによると、個人の記憶は自分の枠外にある社会に定められた基点で形を作っている[1]。言い換えてみれば、個人の記憶と社会的記憶が相互依存的なので、両方を区別できない。また、記憶というものが常に因果的関連性を持つ。一九八〇年代ごろまでばらな記憶関連のそのような思想が忘却のかなたに沈んでいたが、ノラの作品とともに再び――もしくは議論上では初めて――注目を集めた。その現象を説明するにはヨーロッパの社会的・歴史的な背景を忘れては行けない。コルネリセンによると、七〇年代半ばのオイルショックの直後、西洋のメンタリティーがその時まで長年続いていた経済成長に伴うオプティミズムから将来への不安に基づいていた憂鬱や現代の歴史化と国民国家的なアイデンティティに対する興味へと変化した。[2] フランスの場合は脱農業化などの伝統的な生活形式がきっかけで、一方ライン川の向こうのドイツではナチ時代の再検討をきっかけに自分の国の歴史とアイデンティティへの関心が持たれはじめたのであった。

ここで最近の議論で導入された新たな二つの概念に触れたいと思う。アッスマン等は政治的共同体が密着している「共同体記憶」の他に、「伝達的記憶」と「文化的記憶」を見分ける。「伝達的記憶」は個人やグループが実際に経験したこと、また経験・記憶・語り合いグループによる口頭で伝わったことへの記憶の意味を示す。その口頭で伝わった記憶は通常三世代の間残り、小さいコミュニケーショングループ内でしか伝わらないので、静かに消えていくのである。そのため、アッスマンはその記憶を「社会的短期記憶」と呼んでいる。[3] この短期的次元に対して、「文化的記憶」という概念は、時代を越えるように解釈される。この長期的記憶はどの社会や時代にも見出され、繰り返すことによって社会の自己のアイデンティティを確認したり伝えたりする文書・イメージ・儀式である。したがって、「文化的記憶」というのはその社会やグループの過去に由来する特徴についての共同知識である。[4] 記憶の定義や構成は多々あるにもかかわらず、それらすべては記憶と歴史学を二分法的に区別する。コルネリセンはすべての歴史的な出来事と人物やプロセスへの意図的な記憶を「記憶文化」という記憶総合カテゴリーの下で纏めることを提案している。このカテゴリーは歴史に基づくアイデンティティの構成のための機能的な利用を強調している。それゆえに、あらゆる文書類、絵や写真、記念物や建築物、祭りや儀式、象徴的または神話的な表現形式や思想が「記憶文化」の対象となる。[5] 以上のキーワードはまさしくノラの『記憶の場』を思い浮かばせるので、近年の記憶文化史論のブームを引き起こしたノラと彼の画期的な作品に戻ろう。ノラはどうして記憶と場を結びつけたのか。そしてその「場」はいったいどんなところを示しているのか。ノラはその問いに対して一九八四年に出版された『記憶の場』シリーズの初巻の第一部に「記憶と歴史のはざまに」（Entre mémoire et histoire）というタイトルの論文で答えている。[6]

ノラの出発点は一九七〇年代の農民の減少である。彼にとって農民の集団は記憶と一体化したものの典型である。しかし、産業発展

が農業にも辿りついた二〇世紀後半、その共同体が共に保ってきた記憶[7]が消滅の危機に陥ったという。ノラにとって歴史は二つに分けられる。一つは歴史学としての歴史（以下歴史と呼ぶ）、もう一つは記憶としての歴史（以下記憶と呼ぶ）である。[8] 前者は専門家による「定まった規則に従う学術方法で過去の遺跡や史料の分析や解釈」なので、極めて相対的である。[9] それに対して後者は「真の、社会的な、手が加われていない記憶」なので、極めて感情的・主観的で、絶対性を持つものである。[10] いわゆる記憶は純粋であり、本質的や多様であり、具体的であり絶対的である。ここでノラは明らかにアルヴァックスの「共同体記憶」の概念を語っている。それに対して、歴史は相対的なので、非個性的である。ノラのシナリオではかつて歴史と記憶の一体化が乱れてきたので、歴史が最近だんだんと領域を広げている。つまり以前記憶に属したものは徐々に歴史化される。記憶という言葉は相変わらず利用し続けられているが、それは真の記憶ではなく、ただ変容された記録の記憶に過ぎない。いわば、その記憶はもっとも明確なデータにしか基づかないのである。わらわれは今日記憶といっても、自分で思い出そうとして覚えたものではなくて、むしろいつか想起が必要になるだろうから、記録して残したものである。それゆえに、現代の記憶というものは物理的なものに限る。さらに記憶が個人から切り離されていくにつれて、内面的なものが外面的なものへと移行するので、個人が自分の記憶を創るために外部からその材料を取り入れる義務がある。ノラの言葉をかりれば「個々人は記憶の義務により、自分自身についての歴史家とならざるをえない」。[11]

一方、歴史家の仕事も変わってきた。かつて歴史家は過去のことを語り、将来への渡し守であることであった。今の歴史家は記憶が完全に歴史化されるのを防ぐ人である。ここでノラの理論的な背景をはっきりさせない限り、以上のような意見は明確にならないであろう。六〇・七〇年代に流行りはじめたポスト構造主義に従う。彼はそれまでの歴史学のアプローチを批判し、歴史学の対象になるべきものを限界なしと見ている。つまりそれまで歴史学は音楽や食事などの日常的なものを学術的な対象と認めなかった。むしろ政治的な意味やあるイデオロギーを支える観点から歴史を観察しながら分析して語った。それに対してノラは人類学的な立場を取るように、その文化や社会のアイデンティティや自己のイメージの特徴をなす要素を非歴史学的な領域で探ることにした。言い換えてみれば、伝統的な歴史学の方法の結果、記憶と歴史が引き離されてきた。ポスト構造主義な歴史学の使命はその動きを止める・防ぐことである。これを可能にする手段として歴史家であるノラがそこで記憶の場というコンセプトを導入する。それでノラは「記憶の場」のコンセプトによって歴史的な面と記憶の面を再び統合しようとする。

その記憶の場は具体的にどのような「場」であろうか。ノラは次のように説明する。記憶の場は三つのレベルを持っているトポスである。その三つとは物質的な場、象徴としての場、機能としての場であり、いずれも常に共存している。物質的というのは文字どおりの物理的なものには限らない。実際に生きていた人物や神話上の人

物も、実際に起きた事件や作り上げられた事件も、組織も概念も、すべてが含まれている。物質的というのは、それらの歴史学による記録とその上で分析や相対化される観点である。ただそれだけで記憶の場にはなれない。物質的な観点以外に象徴的・機能的な観点によって記憶の場になる。ノラによると、「記憶の場を構成するのは、記憶と歴史の働きであり、このふたつのファクターが重層決定にいたるほど互いに作用しあっているということである。」(12) かくして、記憶の場は歴史（学）的に把握できる場でありながら、「社会的・文化的・政治的に包括されている共同的な記憶、またはアイデンティティの数世代を越える結晶点である」。(13) 包括されている象徴的な意味はもちろん変化がありうる。たとえばとジャンヌ・ダルクを例として挙げてみよう。歴史的な人物の史料は数多くあるし、彼女の歴史上の活躍も多くの議論や歴史学の論文のテーマになった。しかし、時代と立場によってジャンヌという人物像はまったく違う解釈がなされる。彼女が生きていた世紀から一九世紀までほとんど忘却されていた。そして一九世紀の始まりに突然人々の記憶に戻った。共和制主義で王と教会に裏切られた市民の一人として記憶された。一方、彼女は神様の使命でフランスとフランスの王権の救助者としてみられた。どうみられても、彼女がフランスの共同記憶の結晶点であり、フランス人のアイデンティティを建設する記憶の「場」として残っている。以上でノラの記憶の場というコンセプトを単純に紹介した。次に記憶の日本版を作るならば、その中の一つの記憶の場として登場する二宮尊徳の歴史的な面を観察したい。

二宮尊徳(14)

二宮金次郎（尊徳）は天明七年（一七八七年）七月二十三日に相模国栢山（かやま）村（現在神奈川県小田原市）で裕福な農家に生まれ、両親と弟二人の五人暮らしであった。しかし、彼の五歳の時に大洪水に襲われ、これが原因で家族が貧乏のどん底に叩き落され、一家離散の悲劇に遭ったのである。さらに十四歳の時、父が亡くなり、十六歳の時母とも死別したので、伯父さんのところに住むことになった。農作業を手伝いながら独学で読み書き、算術を覚えた。夜なべ仕事や荒れ地に菜種を植えることで、少しずつ財をためて田畑を手に入れ、二十歳の時にいよいよ生家を再興した。その後、彼が自分の田畑を小作地として人に貸し、自分は雇用人となって効率よくお金をためておいたのである。二十五歳の時、奉公先で才覚が認められ、小田原藩の家老服部家の財政立て直しを任された。厳しい倹約と小田原藩からの借用金運用によってこれを成功させた。彼の能力を知った小田原大名、大久保忠真（ただざね）は二宮に彼の親類の宇津家の領地である桜町領（現在栃木県二宮町）の立て直しを頼んだ。当時三十六歳の二宮は生家と田畑を売り、妻と長男を連れて遠いところまで引っ越した。その桜町は年貢の取り立てが厳しかったため、多くの農民が逃げ出した。残った人々はギャンブルや酒などに溺れるなど大変に乱れた村であった。二宮は農民の生産力に応じた消費を定め、生活の勤倹と最新の農業技術を指導した。その成果として生じた富

は「推譲」と称して村に還元することを教えた。これら一連の農法・農村改良策を「報徳仕法」と名付けた二宮は天保の飢饉を乗り切り、ますます桜町領を復興して、一八三七年頼まれた仕法を終了した。一八四二年に御普請役格（ごぶしんやくかく）で幕府にとりたてられた彼は幕府の役人となった。幕府は彼にさっそく日光御神領九十ヵ村の復興を命じた。その仕事のなりゆきを三年間かけて『日光御神領村々荒地起返仕法ひな形』全八十四巻で纏めた。しかし、体調を崩していた二宮尊徳が各地を歩き、御神領九十ヵ村の復興を達した結果、安政三年（一八五六年）に栃木県今市宿の役所で亡くなった。ただし、彼が「報徳仕法」と呼んで残した思想は門人たちに守り続けられた。[15] その中心となる概念は主に「分度」・「推譲」である。前者の「分」は天分のことを示し、つまり現在自分の置かれている状況（予算・健康など）のことである。「度」は程度を示し、自己の現状にあわせて生活の標準を定めることである。具体的には経済的現状を把握したうえで、それに応じて生活設計を行っていくということを意味しているので、こうした作業を「分度を立てる（定める）」「分度内・外」などと表現している。例えば、過去の一〇年間の収入を平均してその範囲内で経常し、それ以上の収入を「分外」とするというような方法をいう。一方、後者の「推譲」というのはものを譲るという意味でもありながら、現在の有するものを将来に譲り、そのうえ子孫に譲り、他人に譲るというような繰り延べ行為の意味を持つ。簡単に言えば、自分の現在状況を正しく計算したうえ、倹約しながら生きていくことであるが、二宮の理想の目的は自分の行動で困窮な人を助けるという社会福祉的な面もあった。その思想を保ち続けた結果、幕末から明治初期ごろの間に報徳思想を基盤としている「報徳社」という組織が形成され、日本各地で結社方式の報徳社運動を展開した。その運動は明治政府の農業政策と結びついて全国に普及した。各地方に設立された分社のネットワークで農民のための思想学習を行うことだけではなく、現在の協同組合に当たる役割も果たしていた。つまり報徳社は「報徳金」という無利息資金を貸し出した。大正十三年（一九二四）に「大日本報徳社」が結成された。現在、報徳社は社団法人の形となって活動を続けている。

身長六尺一寸（一八三センチ）、体重二十四貫（九十キロ）、いかつい顔をして、眉毛が太くて胸が厚くて、その姿を見るだけで二宮尊徳はエネルギッシュな風貌を持っているような人物であった。しかし、この二宮のイメージはあまり記憶に残っていないであろう。むしろ彼の少年であった頃の薪を担ぎながら勉強している姿が通常すぐに思い浮かぶ。児玉幸多は次のように述べている。「多くの人の二宮への親しみは、……孝行・勤勉など……その業績や思想については、十分な説明が行なわれず、二宮は人々の頭の中で、かの銅像のように、いつまでも子供のままで、成長をとめた。」[16] もちろん今でもときどき小学校の校庭で見られる二宮像のためであろう。次はそのまさに場所化された記憶をノラのコンセプトを応用しながら二宮尊徳の考察に入りたいと思う。

記憶の場として見た二宮尊徳

二宮尊徳の記憶はいかにも人工的なものである。西田幾多郎や和辻哲郎などの他の思想家と違って、二宮の作品と思想より彼の作り上げられたイメージが未だに一般的に記憶に残っている。先に述べたように、その記憶はまず戦前に全国の小学校の校庭に配置された彼の像に基づく。すなわちノラの術語を利用すれば、物質的な記憶の場である。しかし同時に、その像で表される彼の熱心に勉強しているイメージはおそらく物理的な像より強く記憶に刻まれている。再びノラの言い方を借りれば、それが象徴的な記憶の場である。当時、思想家として名を残した二宮尊徳はなぜこのイメージで覚えられたか。

彼が一生懸命に働いて、当時農村を立て直した功績に明治政府が目をつけた。「農業恐慌の到来が叫ばれるたびに、尊徳・二宮金次郎は救世主のように登場した。そこには農村再編成に身を投じた壮年の日の実践者の姿はなく、金次郎少年の純粋・従順・勤勉な徳性のみが抽出されて、農業復興の期待される農民像として強調されてきた。」[17] ところが、明治二十四年（一八九一）幸田露伴著「二宮尊徳翁」に薪を担いで読書に励む少年二宮金次郎像が提示された。[18] おそらくその金次郎像によって、明治二十一年（一八八八）に二宮は初めて修身教科書に登場した。[19] 明治二十年代後半になると、二宮の話は多くの修身教科書に採上げられてきた。すべての修身教科書に掲載されることになったのは明治三十六年（一九〇三）に国定教科書制度が確立した時からである。その結果、二宮尊徳は明治天皇についで多く修身教科書に登場することになった。[20] さらに、国定制度になる前の検定教科書と国定教科書に現れる二宮を比較してみると、前者にはたいてい二宮「尊徳」と名付けられる一方で、後者には一貫して二宮「金次郎」として登場する。竹内洋が記述したように「功成り遂げた尊徳は姿を消し、金次郎時代の勤労や倹約がそれ自体価値あるものと説かれる」。[21] そこで興味深いことに、国定教科書制度導入に当たる明治三十六年より全国の小学校の校庭に二宮尊徳の銅像がたてられることになった。つまり教育勅語の内容を重んじた国定教科書制度と共に二宮の少年時代――いわゆる金次郎的な――イメージが政府に積極的に用いられた。この捉え方を支持するのは次のことである。修身教科書と同様に明治四十四年ごろから『尋常小学唱歌第二学年用』に掲載されていた「手本は二宮金次郎」という歌も明治三十五年（一九〇二）まで「二宮尊徳」という題名であった。[22] その三つの観点の連結は明治三十六年頃からの政府によって共同体的な記憶が設置されたことを明確にする。その記憶が歴史上の二宮尊徳という人物のある部分だけを取り出し、その部分に伝えたい内容を積み込んだ。その内容は四つの特徴を持つ道徳であった。第一に、その道徳が江戸時代に利用盛んであった儒教に基づいているものであったため、人々はその既に親密感をもつ概念を簡単に受け入れられたのであろう。第二に、二宮尊徳（金次郎）は武士ではなく農民の者であったので、一般的な人も同一視

ができた。第三に、二宮金次郎のイメージによる道徳が簡単に成功と結びつけられるので、出世希望の人には魅力的だったであろう。そして第四に、政府のイデオロギーが繰り越された道徳によって簡単に教え込むことができた。なぜかといえば、儒教に基づく道徳は個人レベルから国家レベルに引き上げることができる。たとえば、孝行の道徳を親子関係から君臣関係に延長しても無理はない。特に昭和十二年（一九三七）に刊行された国体の本義は国体制度と修身教育の一体化の頂点であった。

学校の修身教育だけでなく、一般市民、特に農民の二宮尊徳への記憶が政府の政策から影響を受けた。たとえば、報徳社のメンバーは報徳仕法を受け入れ、とても努力しながら倹約を実践した。当時の企業家が彼らをよく評価したので、内務省は全国地方に設立された報徳社の分社の激励と援助を始めた。アメリカの日本史専門家であるキャロル・グラックによると、その報徳社のメンバーに対する評価によって二宮尊徳が国定教科書に掲載されることになった。その解釈は正当かどうか疑わしいが、国定教科書制度が確立された明治三六年にも内務書の報徳社への援助が始まった。[23] にもかかわらず、現代に残っている二宮の記憶は学校の校庭に配置された銅像のイメージである。たとえば、八重洲ブックセンターの東京本店の入り口付近に金次郎像が設置されている。[24] もともと二宮金次郎と直接関係はないのに、その本屋は明らかに日本人の共同記憶の中のイメージと読書との関連を目指しているにちがいない。もっと極端な例を挙げると、アメリカのロサンゼルスにある「リトル東京」(Little Tokyo) に一九八三年に二宮像がたてられた。[25] その銅像はノラが示したアイデンティティを建設する共同記憶の具体化として解釈できる。つまり海外に駐在している日本人コミュニティはその銅像で彼らの共同記憶によるアイデンティティを展示しているではないかと考えられる。

しかし、二宮の銅像が伝えていたイメージはいつも好意的にみられたわけでもない。先に述べたように、二宮のイメージは簡単にイデオロギーに悪用されやすかった。実際に国体主義のイデオロギーとして利用されなくても、戦後にアメリカ占領軍にとって、彼は超国家主義・軍事主義な大日本帝国の教育の象徴であり、全国の校庭に配置された銅像は国民に浸透させ、愛国心を培うように思われたであろう。結局、何千本の銅像がほとんど消えていった理由は不明だが、二つの説がある。第一の説は戦争中の資源不足のため、全国の金次郎像は資源として供出させられたという。第二の説によると、戦争が終わった後、二宮の銅像を取り外そうとする動きがあったという。その動きはマッカーサーの指令により、帝国主義な象徴を撤去する目標があった。どちらの説も否定できない。実際に事実は両説の間にあるのであろう。ここで強調すべきなのはピエール・ノラの「記憶の場」といコンセプトを二宮尊徳（金次郎）に利用すれば、記憶の場の三つ観点をそれぞれ観察できるのである。物質的な記憶の場の面で二宮は歴史的人物や銅像、または教科書の課題として現れる。象徴としての記憶の場、二宮のイメージは少なくとも二つの転換を持つ。最初、彼は報徳社の手本として結びつけられた思想家

であった。次に、彼は少年時代の二宮金次郎として学校で子供の修身授業の中心的な対象となった。そこで竹内洋のカテゴリーをもう一度借りれば、二宮のイメージは「尊徳」から「金次郎」に変わった。それと同時に、主張される特徴も道徳と成功を代表する思想家から勤勉で孝行の理想的な子供へかわった。最後に、二宮は国体主義の大日本帝国のイデオロギーの象徴として見られ、排除政策の対象となる。結局、機能としての場は銅像そのものとして表されている。二宮の銅像が配置された理由はある特定のイメージを伝えるためであったからである。同様に、彼が教科書に登場することは解釈できる。しかし、三つの記憶の場の次元は常に密接な関連性を持っているため、一つの次元だけを観察するのでは不十分である。

終わりに

ノラのコンセプトはあらゆる批判をひき起こしたのは言うまでもない。ここでその一つだけを取り上げたい。フランスの左翼に近いアナール派の学者であるノラが「記憶の場」でナショナルなコンセプトを作り上げたのは、逆説的であるように思えてならない。全七巻を見てみると、アルジェリアや植民地などの国民国家的な枠を越える論文は編集されていない。さらにノラ自身は現代のグローバリゼーションを、記憶と歴史との間の距離を広げている原因の一つとして診断した。彼の知識人としての立場と彼の著作の方向性の間の差異は明らかであろう。しかし、ノラはなぜこの立場を選んだのだろうか。彼自身がそれに答えている。彼の解釈で「記憶」はある社会や文化のアイデンティティを、過去を反省しながら確認・建設している。すなわち、彼のフランス人の共同記憶を『記憶の場』として保護する試みはナショナルな立場を取らざるをえないのかもしれない。とにかく『記憶の場』は問題設定をはじめ、対象選択にいたるまで国民国家の自己主張、換言すれば文化論として考えなければならない。

ただし、そのコンセプトの最近の受容、特にフランス以外の国々での受容はまったく別なアプローチをとっている。ヨーロッパの記憶の場、または中央ヨーロッパにおけるトランスナショナルな記憶の場の研究が二〇〇一年から非常に盛んである。[26] さらにそのコンセプトの視野を広げたのは二〇〇三年に刊行されたドイツ・イタリア・日本の記憶の文化を扱っている本である。この本はノラと違ってトランスナショナルなレベルで書かれており、まったく異なる文化圏の日本を取り入れた問題設定になっている。[27] もちろん、その本の課題は枢軸国の第二次世界大戦の過去であるが、ここで興味深いことはこの本の比較の視点である。それぞれの国の歴史とそれについての記憶は違っていても、同じ歴史的な事件についての各国・各社会の記憶を比較すると、総合的にも個別的にも興味深い印象が得られる。そしてグローバリゼーションの影響で国民国家の枠を越える必要が高まる二十一世紀に、トランスナショナルな「記憶の場」の捉え方によってナショナルな文化論的な問題設定を乗り越えられるかもしれない。記憶の場はけっして理想的なコンセプトでもない

し、新しくもないが、慎重に対象となる「場」を選べば、伝統的な歴史学方法で把握できない、ある社会の共同的な記憶についての貴重な情報が獲得できるのであろう。

【注】

(1) Halbwachs Maurice (1967) *"Das kollektive Gedächtnis",* Ferdinand Enke, Stuttgart, p.35

(2) Cornelißen (2003), Cornelißen Christoph (2003) "Was heisst Erinnerungskultur?" p.553 in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht Vol. 10,* Erhard Friedrich Verlag, Seelze, pp.548-563

(3) ibid, p. 554

(4) ibid, p. 554

(5) ibid, p. 555

(6) その論文は長井伸仁訳で『思想』二〇〇〇年五号に刊行された。

(7) ノラのコンセプトでの記憶の概念は建設的な意味を持つ。記憶は過去と未来の間に設定しながら現代の知覚を補助し、意義を与える。かくして、ある共同体のアイデンティティと一貫性を生ずるものである。

(8) 歴史と歴史学はフランス語で歴史（histoire）と表現される。従ってノラも（日本語訳も）歴史を両方の意味で使っているので、ここでもこの曖昧な利用を引き継ぐ。ピエール・ノラ（二〇〇〇）「記憶と歴史のはざまに――記憶の場の研究に向けて」（長井伸仁訳）『思想』九一一番五号　岩波書店　一六頁

(9) François Etienne, Schulze Hagen (2001) (eds.) *"Deutsche Erinnerungsorte",* C.H. Beck, München, p. 14

(10) ノラ（二〇〇〇）一七頁

(11) 同二五頁

(12) 同三〇頁

(13) François, Schulze (2001), p.18

(14) 二宮尊徳の伝記は寺田志郎（一九七五年）『二宮尊徳』朝日新聞社や奈良本辰也（一九七三年）『二宮尊徳・大原幽学』日本思想体系52岩波書店、または児玉幸多（一九七〇）『二宮尊徳』日本の名著26中央公論社五一―五〇頁を参考

(15) 二宮尊徳の思想の詳細については児玉幸多（一九七〇）『二宮尊徳』日本の名著26　中央公論社　三六-四七頁を参考

(16) 児玉（一九七〇）一〇頁

(17) 児玉（一九七〇）九頁

(18) 幸田露伴（一八九一）『二宮尊徳翁』博文館

(19) 詳しくは中村圭吾（一九七〇）『教科書物語-国家と教科書と民衆―』ノーベル書房に参考

(20) 児玉（一九七〇）八頁

(21) 竹内洋（一九七七）『日本人の出世観』学分社　九四頁

(22) 同　九四頁

(23) Gluck Carol (1985) *"Japan's Modern Myths: ideology in the late Meiji period";* Princeton University Press,Princeton N.J.

(24) http://homepage3.nifty.com/webminazuki/sanpo/sanpo 0017.htm

(25) http://www.usc.edu/isd/archives/la/pubart/Downtown/Little_Tokyo/kinjiro1.html

(26) 詳細は Cornelißen 2003, p.549 の注12に参考

(27) Cornelißen Christoph, Klinkhammer Lutz, Schwentker Wolfgang (eds.) (2003) *"Erinnerungskulturen: Deutschland, Italien und Japan seit 1945",* Fischer Taschenbuch, Frankfurt/M.

Ninomiya Sontoku seen as Lieux de mémoire

Ingo Söllner

This article tries to apply the concept of lieux de mémoire to the Japanese agrarian philosopher Ninomiya Sontoku (1787-1856), also known by his juvenile name Kinjiró. This concept, originally introduced by the French historian and member of the Académie Française, Pierre Nora, tries to implement the idea of a historical memory, shared by a certain collective, which is crystallized in so-called "places of memory" (lieux de mémoire). As such, it preserves a more subjective, direct view of history, which is necessarily non-histographic. Thus, material along with non-material historic events, places and persons build these places of memory, which always possess a historical dimension as well as a memorial dimension. It is this memorial dimension that stores e.g. symbolic or functional meanings of such a place. For this reason, various changes of symbolic interpretations over time can be made transparent by using Nora's concept. This clearly is an advantage when dealing with a figure like Ninomiya, who was actually a practice-oriented intellectual in the late Edo-period, but is nowadays widely remembered for his juvenile image of a diligent learner. This article tries to show, how and why this shift of his image took place, due to the extensive use of Ninomiya's image in moral education in the Meiji-period.

Keywords

Ninomiya Sontoku, Pierre Nora, Lieux de mémoire, collective memory, moral education